

## 一般演題 スポーツ外傷 OP3-1 当院におけるプロサッカーチームに対する高気圧酸素治療の現状

○平畑佑輔<sup>1,2,3)</sup> 笹原 潤<sup>1,2,3)</sup> 梅木秀一<sup>1,2)</sup>  
山口信彦<sup>2,4)</sup> 宮本 亘<sup>1,2,3)</sup> 中川 匠<sup>1,2,3)</sup>  
河野博隆<sup>1,3)</sup>

- |                     |
|---------------------|
| 1) 帝京大学スポーツ医科学センター  |
| 2) 帝京大学スポーツ医科学クリニック |
| 3) 帝京大学医学部整形外科科学講座  |
| 4) 医療法人徳洲会 山内病院     |

### 【はじめに】

帝京大学スポーツクリニックでは、スポーツ傷害に特化した診療を行っている。バロテックハニエウダ社製の高気圧酸素治療装置を使用しており、最大定員8名の第2種装置である。可能な限り24時間365日治療を行っており、最大の特徴はスポーツ傷害に特化した高気圧酸素治療(HBOT)を行っている点である。我々はサポートしているチームの活動になるべく帯同し、スポーツ現場で早期に正確な診断を行い、受傷早期からHBOTを行っている。そこで有用なのが、超音波検査装置である。超音波検査装置は持ち運びが自由自在であり、試合中に怪我人が発生した場合、現場で超音波検査装置を用いて可能な限り早期診断を行っている。当院では、試合終了にあわせて臨床工学技士が待機し、試合終了後すみやかにHBOTを行うこともある。

### 【目的】

本研究の目的は、当院における特定の国内プロサッカーチームに対するHBOTの現状を明らかにすることである。

### 【方法】

2023年1月から12月までの間に、特定の国内プロサッカーチームの選手に傷害が発生し、チームドクターが診察した結果、HBOTの適応と判断し治療を行った症例を対象とした。総治療回数、1つの傷害に対する治療を1クールとし1クールの平均治療回数、受傷から治療開始までの平均日数を調査した。画像検査はまず超音波検査を行い、損傷ありと診断した場合にHBOTを開始した。その後MRI検査を行い、治療日数を決定した。

### 【治療条件】

治療装置 バロテックハニエウダ株式会社製  
P-1000SE型(第二種装置)  
治療圧力 2.5ATA  
治療時間 60分 トータル100分

### 【結果】

所属選手31人中、17人にHBOTを実施した。平均年齢は26歳であった。総治療回数は88回で、28傷害に治療を

行った。1クールの平均治療日数は3.1日で、受傷から治療開始までの平均日数は1.5日であった。対象疾患は、肉ばなれが12例、足関節捻挫が8例、靭帯損傷が3例、筋打撲が2例、骨挫傷が2例、その他が1例であった。うち手術療法も併用した症例は膝関節前十字靭帯損傷の1例であった。治療後に治療を中止した症例や、有害事象を発生した症例は1例で、副鼻腔気圧外傷であった。再発・再受傷はなかった。

### 【考察】

当院におけるHBOTの利点は、超音波検査装置を用いることによってスポーツ現場でHBOTの適応か否かの判断が可能であり、受傷早期から治療開始が可能なことにある。一方で、スポーツ傷害に対するHBOTの課題として、大半が自費診療のために一般アスリートには高額な治療になってしまうことや、保険適応外治療のために、特定臨床研究に該当することがあげられる。

### 【結語】

国内プロサッカーチームに対するHBOTは、1クール平均3.1回、受傷から治療開始までは平均1.5日であった。